

川に助けられる

なかなか開拓が進まず、あるいは凶作などで作物がとれないような時でも、川の魚によって飢えから救われ、お金を手に入れることができました。

ウグイなどの小魚はたくさんいます。上流～中流では、ヤマメ（ヤマベ）がたくさんとれました。

中流～下流部では、海から産卵のためにのぼってくるシシャモで、十勝川が真っ黒になるほどだったといわれています。

川をさかのぼったサケやマスをとるのは、禁止されていたのですが、実際には多くの人にとっていたようです（p146・サケの人工ふ化 p174）。

魚は、始めのうち、アイヌの人と物々交かんで手に入れ、やがて釣りやワナ、網などでつかまえるようになりました。



(上) 冬をこすために、川をのぼるウグイの群れ（下頃辺川・浦幌町）。



(右) 産卵するために川をのぼるシシャモのオスは黒くなる。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

米作りと川

開拓者たちが米のごはんを食べることができるのは、正月（とお盆）くらいしかありませんでした。イナキビや麦、ソバなどが毎日の主食だったのです（季節によってはジャガイモやトウモロコシなどもありました）。

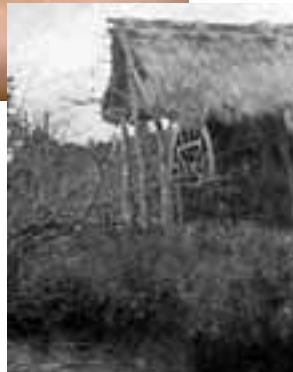
開拓者たちにとって、ふるさとで食べていた米のごはん、そして米作りは大きな夢でした。

水田には水があるので川から引きます。ただ、水温が低いと、なかなかうまくいきません。失敗しながら、ため池をつくるなどの工夫によって、少しずつできるようになりました。

川の水で水車を回し、その力で精米したところもありました。



(上) キビ（もちぎび）。栄養は豊富で、今でも米に混ぜてたかれる。



(右) 福井団体のリーダー青山奥左衛門は明治31年(1898)、米作りに成功した。写真は、精米のための水車小屋(十日川:池田町)

(下写真:「池田町懐かしのアルバム」より)

朝夕の魚とり ... 遊びでもあり仕事でもあった

大正5年(1916)に、様舞尋常小学校(池田町・のちの様舞小学校)を卒業した、奥田実太郎さんのお話です。

「休み時間には狭い廊下や教室で、女子は袋の中に小豆を入れて作ったお手玉つき、男子は竹割りやパッチをし、外では金輪の独楽で遊んだ。

冬は自家製の手籠で学校の坂や、部落会館の裏の植樹地が畑であったのでそこで滑った。

春は桜やコブシの花見、山ではリリー(スズラン)狩り、ワラビ、フキ、ウドの山菜を取ったり、秋はブドウ、コクワやマイタケを取りに行った。

利別川には朝夕、ハエナワをかけ、アカハラ、カチカ、イトウを釣り、四線の小川ではタモで雑魚を掬った。

ハエナワの餌は四線の小川でドジョウや八つ目ウナギを取り、畑の古切株の根を掘ってカブト虫の幼虫を取った。それが放課後の一つの仕事でもあった。

北二線の沼にはよくフナ釣りにいったものである。利別川に泳ぎに行くことは祖母がやかましく禁じていたので行かなかった、それで今も泳げない」

(「様舞小学校開校記念誌『鑽仰』」より。一部改変)

(「池田町開拓夜話」)

2 ハエナワ(延縄): 長いロープにたくさんの釣り針をたらしめて魚をとる方法。